

# 漢字平仮名交じり文中における表記の選択：博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記

著者	深澤 愛
雑誌名	日本語科学
巻	14
ページ	29-53
発行年	2003-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002112">http://doi.org/10.15084/00002112</a>

# 漢字平仮名交じり文中における表記の選択

## — 博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記 —

深 澤 愛  
(大阪大学大学院)

### キーワード

表記選択, 片仮名表記, 口語文体, 片仮名表記の「受け入れ易さ」, 博文館『太陽』

### 要 旨

近代語の表記に関する研究で、これまで外来語の表記も少なからず注目されてきたが、表記「史」を念頭におくなら、その漢字表記から片仮名表記への移行についての考察は看過されてはならない。本稿は博文館の総合雑誌『太陽』(明治28～昭和3)を資料に、漢字平仮名交じり文における外国地名に漢字ではなく片仮名表記が選択された場合に注目し、片仮名表記への移行の要因を考察するものである。

文語文体・口語文体の別と、漢字表記・片仮名表記の選択との関係を調査した結果、(1) 口語文体には片仮名表記の「受け入れ易さ」があること、(2) 使用頻度の高く漢字表記が主流の地名に片仮名表記が選択されるのは、口語文体のもつ「表記の受け入れ易さ」により、漢字表記から片仮名表記へという方向性が顕在化したものであること、を指摘した。(1)(2)に基づく考察から、外国地名が片仮名表記へと移行した要因は、外国地名が定着したことというよりはむしろ、外国地名の定着により引き起こされた口語文体からののはたらきかけであると結論づけられる。

### 1. はじめに

「片仮名表記史」というものが記述できるとすれば、それは片仮名で表記することが、どのようにして、なぜ、行われるようになったかの歴史を記述するということになるだろう。そして近代語をみると、「片仮名表記史」研究の重要課題の一つは外来語の表記であると考えられる。

これまでも、近代語の表記に関する研究で外来語の表記も少なからず注目されてきた。ここで、表記「史」を念頭におくならば、外来語の表記について特に注目されるのは、漢字表記から片仮名表記へという流れを視野に入れた研究である<sup>1)</sup>。

漢字表記から片仮名表記へと移行する理由を考えるには、漢字表記と片仮名表記とが共存していた時期に焦点を絞った研究も必要であろう。なぜ片仮名表記を選択するのかという問いに対して、共時的な視野において、片仮名を選択する理由を扱うことにより初めて提示できる見解もあるはずである<sup>2)</sup>。

本稿は、このような問題意識に基づき、博文館より刊行された総合雑誌『太陽』(明治28(1895)～昭和3(1928))を資料として、共時的に考えた場合の漢字表記・片仮名表記の選択要因を捉え、それを基に漢字表記から片仮名表記への移行の要因を考察し、近代日本語表記史を捉える一視点を

を提供しようとするものである。

本稿は、2節で問題の所在を明らかにし、3節で調査資料『太陽』と調査方法について述べ、それらをふまえて4節において『太陽』における外国地名の、片仮名表記・漢字表記の別と文体の別との関わりについて実態を整理・考察し、5節に結論を述べる、という構成をとっている。

## 2. 問題の所在

松村(1977)は、まとまった著作物において、意識的に漢字平仮名交じり文中の外国語・外来語を片仮名表記したのは新井白石が先駆であるとした。その上で、白石以前には、本文が漢字平仮名交じり文であれば、外国語・外来語も平仮名表記となり、漢字片仮名交じり文であれば片仮名表記となることや、「漢字平仮名交じりの文章で、文中の外国語・外来語を片仮名で表記するということが一般化するの、やはり明治以後のことということになる」(p.1131)ことなどを指摘している。

近代語において、外来語を漢字表記するか片仮名表記するかという観点でまとめたものには、国立国語研究所(1987)の「外来語の表記」(p.186—189)がある。この調査によれば、1906年から1976年にかけての、外来語の漢字表記と仮名表記との比率のおおよその変遷を知ることが可能である。また、貝(1997)は国定読本の外来語表記について調査し、「第一期読本では平仮名文中なら平仮名で、片仮名文中なら片仮名で書かれ、ことさら外来語を際立たせることはしない。第二期読本から第五期読本までは「片仮名表記(拗音と促音は小書き、長音符号によるのばす音の表記)」を原則とする方針が一貫して行われた。」<sup>3</sup>とまとめた(p.166—167)。

しかし、先にも述べたように、変遷の要因をとらえるには、漢字表記・片仮名表記の選択要因を明らかにすることが必要であり、その点では、これらの先行研究のみでは不十分である。

さて、漢字表記・片仮名表記の選択要因を探るには、同次元で比較することが重要である。すなわち、漢字表記と片仮名表記とが、

- ① 同語におけるものであること
- ② 同資料内におけるものであること

がまず条件となる。ただし、例えば「漢字(意訳)」と「片仮名」という例であると、漢語と外来語との比較ということになってしまいかねない。そこで、第3の条件として、

- ③ 片仮名表記と漢字表記(漢字音を借用したもの)とであること

が必要である。本稿では、外来語のうちでも、三つの条件を最も満たす用例が多く現れる外国地名に焦点を絞って考察を加えていくことにしたい<sup>4</sup>。

## 3. 調査資料と調査方法

### 3. 1. 博文館『太陽』

外国地名の用例を効率的に採取できる資料としては、外国地名の出現率の高い新聞、雑誌(特に言論雑誌)、外国を扱った地誌などの書籍、が考えられるだろう。このうち、表記の変遷を捉え

るには、書籍よりも、継続的に長期間発行される新聞や雑誌の方が資料として適している。さらに、表記の考察には書記者個人との関わりを密接に考慮すべき場合があるので、基本的に無記名の新聞よりも、記名の比較的多い雑誌の方が適当である。そこで本稿では総合雑誌に注目した。なぜ総合雑誌かというと、多様なジャンルの文章を一度に相対的に見ることができるため、単一のジャンルより成る雑誌を集めた場合よりも、用例を含む文章がどのような特徴を持つ文章か把握しやすいと判断したからである。

明治期を刊行期間に含む総合雑誌には、『国民之友』『中央公論』『太陽』などがある<sup>5</sup>。これらのうち、『国民之友』は発行期間が約10年間で、表記の変遷を捉えるための資料としてはいささか不十分な長さである。『中央公論』は、既に国立国語研究所(1987)で大規模な調査が行われており、また刊行期間も長く、その点では資料として有効である。しかし、本稿が特に注目する明治期のほとんどの期間『国民之友』や『太陽』など他総合雑誌に発行部数の面で押さえられており、より多くの人間が目にした資料という点<sup>6</sup>では『国民之友』『太陽』に一步譲るところがあると考えられるのである。

『太陽』は博文館より明治28年1月から昭和3年2月まで刊行された。それまで同社から刊行されていた、『日本大家論集』『日本商業雑誌』『日本農業新誌』『日本之法律』『婦女雑誌』の統合により創刊されたものである。創刊号は、論説・講演・史伝・地理・小説・雑録・文苑・芸苑・家庭・政治・法律・文学・科学・美術・商業・農業・工業・社会・海外思想・海内思想・輿論一斑・社交案内・海外彙報・海内彙報・英文という、雑多と言えるほどに豊富かつ多様な欄を持ち、その豊富さ多様さという特徴は、論説欄一つを取り上げても「既成の言論雑誌と比較するなら、思想的な特徴の見いだしにくいような、総花的で、通俗的な巨大雑誌という性格」(鈴木(1996) p.65)を持っていたのである。また、それに応じて受容者層も知識人層を中心に幅広かったことが永嶺(1997)で指摘されている。この欄の豊富さ多様さは、形態を変えつつも終刊まで維持された。このように、質・量ともに豊かな『太陽』は、本稿の目指す調査・考察に非常に適した資料であると判断し、中心資料として用いることにした<sup>7</sup>。ただし、『太陽』はほぼ全ての文章が漢字平仮名交じりで書かれているので、必然的に本稿は漢字平仮名交じり文における、外国地名表記の考察になる<sup>8</sup>。

### 3. 2. 調査範囲と考察対象

今回用いたのは、『太陽』第1巻(明治28(1895)年)から第34巻(昭和3(1928)年)までの各第1号(1月号)、計34冊である。各号とも漢字平仮名交じりで書かれた部分のうち、題名、表、箇条書きの文、及び本文中の引用部分を除く本文を調査範囲とし<sup>9</sup>、一部の漢字片仮名交じりの文(表の脇に付された注など)、韻文、広告欄及び付録は範囲外とした。具体的には、頁番号の振られ始めた頁から、奥付のある頁までの漢字平仮名交じりの散文(上記の四つの部分を除く)を調査範囲とするということである。

次に、調査対象とする外国地名について、『太陽』に現れる外国地名表記のバリエーションのうち、平仮名、アルファベットによる表記を除いたものを示す。この二つを除くのは、これらが

例外的少数であるため、本稿では特に考察の対象とはしなかったためである。外国地名表記には次の4種のバリエーションがある<sup>10</sup>。

- A) 本行に漢字のみで表記（漢漢）
- B) 本行に片仮名のみで表記（片片）
- C) 漢字の本行に片仮名ルビを付して表記（漢漢<sup>片片片</sup>）
- D) 漢字の本行に平仮名ルビを付して表記（漢漢<sup>平平平</sup>）

それぞれ『太陽』における〈アフリカ〉<sup>11</sup>の例を以下に挙げる。

- (1) 今は亞非利加に於けるサハラ大砂漠を以て觀るに、(2-1, p.204)<sup>12</sup> —A
- (2) アフリカの南方には殆ど同じ場所、從つて同じ氣候の地に、黄色のホツテントツトと黒色のブツシマンとが住んで居ます。(9-1, p.198) —B
- (3) 其<sup>その</sup>素子の在る所、尚ほ東歐羅巴、北亞非利加<sup>きたアフリカ</sup>をも遍歴せんとせし也。(8-1, p.162) —C
- (4) 終に歐羅巴<sup>ようろぱ</sup>、亞西亞<sup>あじあ</sup>、亞非利加<sup>アフリカ</sup>の三大陸を併呑し、(4-1, p.65) —D

さて、本稿で考察するのは表記の選択についてであり、その考察のためにはどのように表記さ

れたものが有効であるかは2節に述べた。2節に挙げた③の条件から、考察対象としては、片仮名表記された例と漢字音借用による漢字表記の例との両方を持つ外国地名が最も有効である。つまり、先のAとBに該当する表記を複数にまたがって持つ外国地名が本稿での考察対象となる。例えば、〈アフリカ〉は、先に挙げたように、漢字表記の「亞弗利加」(A)、片仮名表記の「アフリカ」(B)の例がともに見られるので、考察対象となる。一方、片仮名表記の例のみで漢字表記された例を見ないもの、あるいはその逆のもの、つまり片方の表記しか選択されないものは、本稿では考察対象としない<sup>13</sup>。そして、C、Dのようなルビ付き表記は、本稿では仮名と漢字との並列表記として捉え、AとBの中間的表記法として、考察には補助的に用いることにする。また、同じく③の条件から、「英」(=〈イギリス〉)、「英蘇蘭」(=〈イングランド〉・〈スコットランド〉・〈アイルランド〉)、「米国」(=〈アメリカ〉)、「華府」(=〈ワシントン〉)など簡略表記<sup>14</sup>の例は除外される。

以上に従って、主な考察対象となる漢字表記あるいは片仮名表記された外国地名、また、ルビ付きの外国地名の用例数<sup>15</sup>を各号ごとに示すと、表1

【表1】表記別外国地名延べ語数

刊 年	巻	片 仮 名	ルビ付		漢 字	の片 割仮 合名
			片	平		
M28 (1895)	1	44	22	29	189	15.5
29 (1896)	2	25		1	218	10.2
30 (1897)	3	54	8	9	281	9.1
31 (1898)	4	25	73	71	211	6.6
32 (1899)	5	13	3	7	188	6.2
33 (1900)	6	73	33	14	278	18.3
34 (1901)	7	29	13	19	280	8.5
35 (1902)	8	32	28	6	225	11.0
36 (1903)	9	58	18		377	12.8
37 (1904)	10	17	2	10	280	5.5
38 (1905)	11	69	2	7	244	21.4
39 (1906)	12	79	20	13	324	18.1
40 (1907)	13	250	3	6	205	53.9
41 (1908)	14	28	14	16	161	12.8
42 (1909)	15	54	18	52	341	11.6
43 (1910)	16	61	5	17	210	20.8
44 (1911)	17	23	3	151	14	12.4
45 (1912)	18	45		228	8	16.1
T2 (1913)	19	118	6	186	7	37.2
3 (1914)	20	10	4	202	15	4.3
4 (1915)	21	410	8	529	31	41.9
5 (1916)	22	33	7	334	87	7.2
6 (1917)	23	58	4	696	6	7.6
7 (1918)	24	24	19	483	34	4.3
8 (1919)	25	30	2	16	443	6.5
9 (1920)	26	9			534	1.7
10 (1921)	27	83	1		252	24.7
11 (1922)	28	58			252	18.7
12 (1923)	29	153	1		333	31.4
13 (1924)	30	89	70	9	2	52.4
14 (1925)	31	108	229	107	19	17.1
15 (1926)	32	245	5	1	183	56.5
S2 (1927)	33	278	2		119	69.7
3 (1928)	34	140		3	114	54.5

※表中空欄は、該当する例のないことを示す（以下同）  
※「ルビ付」欄中「片」は片仮名ルビを、「平」は平仮名ルビを示す

ようになる。「片仮名の割合」とは、各号ごとの外国地名延べ語数の総数に占める片仮名表記外国地名の割合(%)である。表1は大きく3期に分けて見ることができる。すなわち、漢字表記(ルビ無し)された例が圧倒的に多い明治28～43年ごろと、ルビ付き漢字表記が主流となる明治44～大正7年ごろ、片仮名表記語の割合がほぼ継続的に約2割以上を占める大正10～昭和3年ごろである。もちろん各号ごとに数値の変化はあるものの、全体としては片仮名表記語の占める割合が漸増していると考えられる。国立国語研究所(1987)による『中央公論』の調査では、外来語の片仮名表記と漢字表記との数が1926年に逆転していることを指摘している<sup>16</sup>(p.186—189)が、表1でも32巻1号、33巻1号、34巻1号は全て片仮名表記語が漢字表記語よりも割合が高くなっており、『太陽』によっても『中央公論』と同様の指摘ができる。もちろん、本稿と調査方法が異なるため、安易な比較は避けねばならないが、『太陽』に見られる外国地名表記の漸次片仮名化は、この時期の流れに沿うものと捉えて大過ないだろう。つまり、『太陽』の外国地名表記は近代語における外来語表記史の流れに沿うものと考えられるのである。

#### 4. 片仮名表記の選択と漢字表記の選択

##### 4.1. 考察の視点—文体による表記の分類—

深澤(2001)では、『太陽』創刊号を取り上げて外国地名の表記を調査し、漢字表記と片仮名表記と両方向われる外国地名のうち片仮名表記の例が「戦争後の學術」という文章に集中的に現れるのには、「戦争後の學術」が速記録であり、それを念頭においた文体であることが要因であることを指摘した。これを承けて、本稿でも文体差という視点から表記選択の考察を試みたい。

『太陽』創刊は明治28年である。森岡(1991)によれば、明治20年代は、「各種の文体が統合されて、文語系の文章には「明治普通文」(実用)と「雅俗折衷体」(文学)が用いられ、口語系の文章には「演説体」(実用)と「初期口語体」(文学)が用いられるようになる。」(p.18)時期である。実際、『太陽』創刊号にも様々な文体の文章が掲載されている。

- (5) 支那といへば犬打童まで野蠻の國と嫌へば、唐虞三代孔子の道も信用を失ふたるに相違なし。去ながら學理は國の興廢に關するに非ず、印度は滅びても佛教は衰へず、猶太は滅びても基督教は益盛んなり、(1-1學界の大革新p.3)
- (6) 盲にして七十八歳の翁は手引をも伴れざるなり。手引をも伴れざる七十八歳の盲の翁は、親不知の沖を越ゆべき船に乗りたるなり。衆人は其無法なるに愕けり。(1-1取舵p.83)
- (7) 古代に於きましてはグレシヤ ローマ 抔といふ國々が随分學術の盛んなる國でありましたが其グレシヤに於きまして哲學者詩人等の夥しく出ました頃はグレシヤが世界の文明の中心とも云ふべき程偉大の權力を世界に揮つて居る時でありました、(1-1戦争後の學術p.13)

これらは、後年には

- (8) 五年まへ本誌に更紗名義考をかいたことがあつた。五年のち復び更紗の話をするを容るされたい。私はあの後ずるぶんサラサの語原についてはひとりで苦心もし、人の異説をも聞いたものだが、まだ徹底もせず完成もしない。(34-1更紗散札p.125)

のように文体が口語体に統一されているのである。

本稿の考察の主眼は、漢字表記か片仮名表記かの選択に文体がどのように関わっているかをさぐることにある。文体を細かく分類してしまうことは、それだけ同次元に扱えるものを少なくし、考察を煩雑にし、却って結論を見失う危険を犯すことになりかねない。細かい分類による文体ごとの研究がいずれ必要になるとしても、まずは全体の把握をこころみることが先決であると考え、

本稿では森岡(1991)の分類に従った「文語文体」と「口語文体」とを主な分類とし、より詳細な分類での文体は適宜示す<sup>17)</sup>。

以上に基づき、外国地名の用例を含む文章<sup>18)</sup>を、各号ごとに文語文体のものと口語文体のものに分類しまとめたのが表2である。

数量面から、それぞれ特徴をもつ四つの時期に分類できる。1巻から14巻までは、口語文体の文章に比べて文語文体の文章の方が圧倒的に優勢な時期である。10巻から14巻は、それまでに比べれば口語文体のものの比率が高いものの、それでも文語文体のものの数の半数を上回ることではない。15巻から20巻までは、口語文体の文章の方が文語文体の文章より数が多くはなるが、いまだ文語文体の文章の勢力も保たれている時期である。16、18巻では文語文体のものの数は口語文体のものの数の2/3あり、また15巻では半数、20巻もほぼ半数である。これが、口語文体の文章の方が圧倒的に優勢になったのが次の21巻から28巻までである。そして、29巻以降は外国地名を含む文章で文語文体のものは全くなくなるのである。以下、1巻～14巻をⅠ期、15巻～20巻をⅡ期、21巻～28巻をⅢ期、29巻～34巻をⅣ期とし、各期に含まれる文章は同時期のものとして扱う。

さて、以上のような文体の史的变化を基盤として、本稿の考察は片仮名表記を中心にして漢字表記との比較を行うという形で進めたい。また、『太陽』発刊時期が文体史においては口語文体隆盛

【表2】文語文体と口語文体

刊年	巻	文語	口語
M28 (1895)	1	38	3
29 (1896)	2	13	3
30 (1897)	3	40	3
31 (1898)	4	42	
32 (1899)	5	41	
33 (1900)	6	37	8
34 (1901)	7	48	6
35 (1902)	8	35	5
36 (1903)	9	46	5
37 (1904)	10	35	9
38 (1905)	11	32	14
39 (1906)	12	36	12
40 (1907)	13	25	10
41 (1908)	14	21	8
42 (1909)	15	10	20
43 (1910)	16	15	23
44 (1911)	17	6	16
45 (1912)	18	8	12
T2 (1913)	19	6	17
3 (1914)	20	10	11
4 (1915)	21	3	19
5 (1916)	22	4	18
6 (1917)	23	4	15
7 (1918)	24	2	19
8 (1919)	25	2	25
9 (1920)	26	5	12
10 (1921)	27		18
11 (1922)	28	1	16
12 (1923)	29		24
13 (1924)	30		39
14 (1925)	31		66
15 (1926)	32		30
S2 (1927)	33		46
3 (1928)	34		30

※数字は文章数

の時期に即していることを考え、文体については口語文体を中心に文語文体との比較を行うという形で進めたい。よって、考察の視点は、次の2点にまとめられる。

(a) 片仮名表記が選択された地名における、口語文体と文語文体との関わり

(b) 口語文体における、片仮名表記と漢字表記との関わり

4. 2節では(a)について、4. 3節では(b)について取り上げる。

## 4. 2. 表記の選択と文体の選択

### 4. 2. 1. 漢字表記が選択された外国地名と文体

表3表4は、それぞれ漢字表記された外国地名について、出現頻度の高い順に32位まで<sup>19</sup>を、各期ごとにどのように用例が出現するかを示したものである。表3では文語文体における場合を、

【表3】文語文体における漢字表記外国地名

	地名	I期	II期	III期	IV期
1	イギリス	2,3,4,5,6,7,8,11,13	16		
2	アメリカ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,11,12,13	15		
3	ドイツ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	15,16,17,20	21,25,26	
4	ロシア	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	15,16		
5	ヨーロッパ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	15,16		
6	フランス	1,2,3,4,5,6,7,9,11,12,13	15,16	25,26	
7	インド	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	15,16,19	25,26	
8	イタリア	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,12,14	15,16	26	
9	オーストリア	1,2,3,4,5,6,7,8,9,13,14	15,16	26	
10	アジア	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,14	15	21	
11	トルコ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12	16		
12	パリ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	15,16	25,26	
13	ギリシャ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,14	15,16		
14	ロンドン	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14	16	26	
15	ローマ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,12,13,14	16		
16	オランダ	3,4,5,7,8,9,10,11,13,14	15,20	25,26	
17	ベルギー	2,3,5,7,8,9,11,12,14	15,16	25,26	
18	アフリカ	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,13	15,16		
19	スペイン	1,2,3,4,5,6,7,8,9,11,12,13,14	15,16		
20	シベリア	1,2,3,6,7,8,9,10,11,12,13	15,18	21	
21	セルビア	8			
22	ニューヨーク	2,3,4,5,7,8,9,10,12,13,14	16		
23	ベルリン	1,2,3,4,6,7,8,9,10,11,12,13	16		
24	ベルシア	2,3,4,7,8,9,10,11,12,13	16		
25	ポーランド	1,8,9,12			
26	ルーマニア				
27	バルカン	10,12		26	
28	メキシコ	1,3,5,14			
29	エジプト	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13	16	26	
30	ユダヤ	1,2,4,5,8,9,10,12,14	15	26	
31	ワシントン	3,6,9,12	15,16	26	
32	オーストラリア	6		26	

※無印の番号＝その巻1号に、漢字表記外国地名を含む文章が一つある。

※網掛けされた番号＝その巻1号に、漢字表記外国地名を含む文章が複数ある。

表4では口語文体における場合を示している。表中の数字は巻番号を表す。巻番号を示したのは、外国地名の用例数ではなく外国地名を含む文章の数によって考察を行うためである。用例が一つの文章に集中しているより、複数の文章に散見する方が、その外国地名の広く用いられている実態を表すと考えられるため、基本的に考察は用例数ではなく、文章数によって行う。

例えば、表3 I期〈イギリス〉欄は、〈イギリス〉を含む文章が4巻7巻8巻11巻1号にはそれぞれ一つ、2巻3巻5巻6巻13巻1号にはそれぞれ二つ以上あることを意味する。

両表からまず指摘できるのは、I期において漢字表

記外国地名を含む文語文体の文章の数(表3)の方が口語文体(表4)のものより多く、II期(口語文体の方が優勢ではあるが、文語文体の勢力もいまだ保たれている時期)において両者の数が拮抗し、III期において数が逆転していることである。これらは基本的に両期における文語文体・口語文体それぞれの母数の差を反映していると考えられる。総文章数は、I期においては文語文体489：口語文体86、II期においては文語文体55：口語文体99、III期においては文語文体21：口語文体142である。この文章数の差を反映して、表3表4の数値が変動していると考えられるのである。なお、貝(1997)は、大正7(1918)年より使用が開始された第三期国定読本において外国地名は印度・西藏を除き片仮名表記となることを指摘した。III期が大正4(1915)～大正11(1922)年を範囲とす



ることを考えると、Ⅲ期において外国地名漢字表記が減少していることは、単に母数の問題だけではなく、この時期に外国地名の表記が片仮名表記へと移行しつつあったことを考え合わせて捉えるべきであろう。このことについては4. 3節で触れる。が、いずれにせよ、表3表4は、漢字表記の選択について文体の別との関わりを積極的に示すものではないのである。

【表4】口語文体における漢字表記外国地名

	地 名	I 期	Ⅱ 期	Ⅲ 期	Ⅳ 期
1	イギリス	1,6,10,11,12,14	15,16	25,26,27	29,31,33,34
2	アメリカ	2,3,9,10,12,13,14	15,16	25,26,27,28	29,32,33,34
3	ドイツ	1,6,8,9,10,11,12,13,14	15,16,17,18,19,20	21,22,23,24,25,26,27,28	29,31,32,33,34
4	ロシア	1,7,8,10,11,13	15,16	21,22,24,25,26,27,28	29,32,33
5	ヨーロッパ	1,2,3,6,7,9,10,11,12,13,14	15	25,27,28	29,32
6	フランス	1,7,8,10,11,12,13,14	15,16,20	24,25,26,27,28	29,31,32,33,34
7	インド	1,7,8,10,11,12,13	15,16	22,25,26,27,28	29,30,32,33,34
8	イタリア	1,9,10,11	15,16,18	22,23,24,25,26,27,28	29,31,32,33,34
9	オーストリア		15	25,26,28	33
10	アジア	6,10,11,14	15,16	22,25,26,27,28	29,32,33,34
11	トルコ	6,10,11	15,18	22,25,26,27	29,33,34
12	パリ	6,11,12,14	15,16	24,25,26,27,28	29,32,33,34
13	ギリシャ	2,7,10	15,17	25,26,27,28,29	29,32,33,34
14	ロンドン	6,11,12,13,14	15,16	24,25,27,28	29,32
15	ローマ	6,7,9,10,12	17,18	21,24,25,26,27,28	29,32,33,34
16	オランダ	12,13	15,19	22,25,26,27	29,31,33,34
17	ベルギー	14	16,20	21,22,24,25,27,28	29,31,32,33
18	アフリカ	12,13		22,25,28	29,34
19	スペイン	11	15,16	22,24,26,27	29,30,33,34
20	シベリア	6,7,10,11,12		25,26,27,28	29,31,32,33,34
21	セルビア			25,26,27	
22	ニューヨーク	6,14	15	24,25,27,28	29,31,32,33,34
23	ベルリン	9,10,11,12	15,16	23,26,27,28	29,34
24	ペルシア	13		22,26,27,28	29,34
25	ポーランド			25,27	29,33
26	ルーマニア			26,27	32
27	バルカン			25,26	
28	メキシコ	10,13	16		32
29	エジプト	12	15	27,28	29,32
30	ユダヤ	1,2,10	15	24,25,26,27,28	29
31	ワシントン			27,28	32,34
32	オーストラリア				

※無印の番号＝その巻1号に、漢字表記外国地名を含む文章が一つある。

※網掛けされた番号＝その巻1号に、漢字表記外国地名を含む文章が複数ある。

I 期、Ⅱ 期、Ⅲ 期の違いはこの後触れる片仮名表記の場合と対照させたときに、より特徴が明確になるのであるが、先に漢字表記についての結論を述べると、外国地名の漢字表記は、文体に関わらず行われるということが言える。佐伯(1987)は、「官板バタビヤ新聞」に見られる外国地名の表記について、調査範囲中片仮名表記の例のみ現れる地名については、「使用度数がいくぶん高くても、それほどあちこちの記事に用いられる地名ではないという意識」が「かたかな表記にとどまらせた」(p.150)とし、一方、片仮名表記・ルビ付漢字表記・漢字表記の三様の例が現れる地名については、「はじめから頻用される地名であるとの見込みのもとに、漢字が捜し当てられ振りがなが付された」(p.158)とした。幕末期における状況と一様に述べることは出来ないが、これらの漢字表記が文体に関わらず使用されるの理由の一つには、使用頻度の高さがあると考えられる<sup>20</sup>。

#### 4. 2. 2. 片仮名表記が選択された外国地名と文体

表5表6は、それぞれ片仮名表記された外国地名を出現頻度の高い順に、各期ごとにどのような用例が出現するかを示したものである。表5では文語文体における場合を、表6では口語文体における場合を示している。

【表5】文語文体における片仮名表記外国地名

	地 名	I 期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
1	イギリス	6,13			
2	アメリカ	13			
3	ドイツ	6,13			
4	ロシア	6,8,13			
5	ヨーロッパ	13			
6	フランス	13		21	
7	インド	6,13			
8	イタリア	11,13			
9	オーストリア	13			
10	アジア	13			
11	トルコ	13	20		
12	パリ	1,3			
13	ギリシャ	2,13,14			
14	ロンドン	2,3,4,11,13	16		
15	ローマ	1,4,9,13,14			
16	オランダ	6,8,13	16		
17	ベルギー	1			
18	アフリカ	3,7,13,14	15		
19	スペイン	11,13			
20	シベリア	1,3,8			
21	セルビア	4,7			
22	ニューヨーク	3,4	15		
23	ベルリン	9,11			
24	ベルシア	1,2,3,13			
25	ポーランド	2,7,10			
26	ルーマニア	4,7,9	18		
27	バルカン	2,6,9,12,13	16		
28	メキシコ	3			
29	エジプト	13			
30	ユダヤ	8,13			
31	ワシントン	4,7,8,13,14			
32	オーストラリア	13			

※無印の番号＝その巻1号に、片仮名表記外国地名を含む文章が一つある。

※網掛けされた番号＝その巻1号に、片仮名表記外国地名を含む文章が複数ある。

まず指摘できるのは、Ⅱ期、すなわち数においては口語文体の方が勝っているものの、文語文体の勢力もいまだ保たれていた時期に、文語文体における片仮名表記外国地名を含む文章がほとんどなくなっていることである(表5)。一見、これも両文体の文章数の差によるもののように見えるが、表3Ⅱ期のように文語文体でもほとんどの地名に用例のあった漢字表記の場合を考え合わせると、Ⅱ期における文章数の差(文語文体55:口語文体99)をより適切に反映しているのは漢字表記の場合であり、Ⅱ期の文語文体において外国地名を含む文章数がほぼ0である片仮名表記の場合は、文章数の差を反映しているとは考えにくい。Ⅱ期の文語文体において文章数がほぼ0であることは、片仮名表記外国地名の特質といえるのである。

文語文体Ⅱ期で片仮名表記が行われている〈トルコ〉〈ロンドン〉〈オランダ〉〈アフリカ〉〈ニューヨーク〉〈ルーマニア〉〈バルカン〉の中には、表記選択に個別の理由が考えられるものがある。

まず、もともと漢字表記のみ行うことを避ける傾向にある地名と考えられるものがある。

(9) 次でルーマニア王の七十四、在位三十二年に及べるあり、佛國大統領フアリエール氏は七十二、<sup>でんまーく</sup>丁抹王亦七十の高齢なるも在位は尚ほ六年に過ぎず。(18-1今上天皇陛下p.26)

(10) 三國同盟に對する三國協商なるもの成立し、或は顯はれてモロツコ事件となり、或は發してバルカン問題と為り、(16-1世界歴史に於ける日露戦争の効果p.49)

〈ルーマニア〉(1例)は、片仮名表記のものが13の文章に計36例、ルビ付き漢字表記のものが六つの文章に計29例、ルビ無し漢字表記のものが三つの文章に36例見られる地名である。このことから、〈ルーマニア〉の表記は漢字表記のみ行うことを避ける傾向があると考えられ、例文の「ルーマニヤ」も、その傾向に即したものと考えられる。〈バルカン〉(2例、例文の他の箇所も「バルカン問題」として現れる)も、片仮名表記のものが25の文章に計43例、ルビ付き漢字表記のものが

14の文章に計55例、ルビ無し漢字表記のものが八つの文章に計35例であり、やはり〈ルーマニア〉と同様に考えられる。このことは、〈ルーマニア〉〈バルカン〉の使用頻度の低さと結び付けて考えられるが、使用頻度の低さと片仮名表記選択との関係については、4. 3節で詳しく述べる。

このほか、漢字表記と片仮名表記との使い分けにより片仮名表記が選択されたと考えられるものがある。

- (11) 千八百一年二十五萬弗の資本を擁して、ニウヨークに設立せられたるThe marine Insurance Companyは、(15-1二百年前の保険事業p.208)

【表6】口語文体における片仮名表記外国地名

	地 名	I 期	II 期	III 期	IV 期
1	イギリス	3,6,12,14	15,18,19	21,22,27,28	29,30,32,33,34
2	アメリカ	9,10,11,12	15,16	21,28	29,30,31,32,33,34
3	ドイツ	6,10,11,12	19	21,22,25,27,28	29,30,31,32,33,34
4	ロシア	11,12,14	15,18,19	21,25,26,27,28	29,30,31,32,33,34
5	ヨーロッパ	9,10,11,12	15,19	21,27,28	29,30,31,32,33,34
6	フランス	6,9,11,12	15,18,19	21,22,25,27,28	29,30,31,32,33,34
7	インド				32
8	イタリア	12	15,18,19	21,23	29,30,32,33,34
9	オーストリア	12	15,18	21	29,30,31,32,33,34
10	アジア	11,12	16,19	21	32,33,34
11	トルコ	12	15,18,19	21	29,30,32,33
12	パリ	9,10		21,28	30,31,32,33
13	ギリシャ	1,12	16,19	27,28	29,30,32,33
14	ロンドン	1,14	16,19,20	22	29,30,31,32,33,34
15	ローマ	1,12	15,16,19	28	29,30,31,32,33,34
16	オランダ	1,12	16	21,25	29,32,33,34
17	ベルギー	1		21	29,30,32,33
18	アフリカ	9,10,11	16	21,22,25,26	29,30,31,32,33
19	スペイン		18	21	29,31,32,33
20	シベリア	14	16	24,27	31,32
21	セルビア	1	19	21,22,23	32
22	ニューヨーク	9		27	29,30,31,32,33
23	ベルリン			21	30,31,33
24	ベルシア	21	19		29,31,32
25	ポーランド		18,20	22	29,31,32,33
26	ルーマニア	1		21,22,23	31,32,33
27	バルカン	13	15,16,19	21,22,23,24,25,27	31,33
28	メキシコ	9	15,18	23,25,28	29,32,33
29	エジプト		15	21,28	30,31,32,33
30	ユダヤ		15,19		29,30,33
31	ワシントン	11		22,27,28	29,30,31,32,33,34
32	オーストラリア	9	16	24	31,33

※無印の番号＝その巻1号に、片仮名表記外国地名を含む文章が一つある。

※網掛けされた番号＝その巻1号に、片仮名表記外国地名を含む文章が複数ある。

メキシコ」が端的に表しているように、この文章では国名としての〈メキシコ〉は漢字で、都市名としての〈メキシコ〉は片仮名で表記し、意識的に使い分けられていることが分かる<sup>21</sup>。

ただし、〈オランダ〉(1例)、〈トルコ〉(1例)、〈ロンドン〉(7例)は、現段階では片仮名表記が選択される要因は不明である。

- (13) ネザランドの委員は十人以上の労働者を使役するはこれを工場と稱すべしといひ、伊太利の委員も亦これに賛同の意を表したりき。(16-1工場法案管見p.58)

この文章に現れる〈ニューヨーク〉はこの1例だけであるが、この文章では、国名は「独逸」「和蘭」「噠馬」「佛魯西」のように漢字表記されており、〈ニューヨーク〉を含む都市名は「ペンシルバニア」「ベルリン」「ハムバーグ」のように片仮名表記である。このように国名と都市名とで表記を使い分けられていると考えられる文章は他にもあり、

- (12) 墨西哥の我國に於ける關係は將來益々親密なるべし、余が萬國都會案内の第一として先づ墨國の首府メキシコを擇びたるは是が為めなり、(3-1萬國都會案内p.159)

の〈メキシコ〉が好例である。副題「墨西哥の首府メ

(14) トルコ種族中のウイグルの如き、またこれより論ぜんとする朝鮮・満洲・蒙古の如きいづれも然り。(20-1 朝鮮と満洲蒙古との關係p.86)

(15) 佛國は何くに在る乎と問はゞ佛國は巴里に在り、巴里は即ち佛國なりと答ふことを得べき事實少なしとせず、然れども英國はロンドンにあらず、(16-1 英國近時の政局に就てp.4)

以上のようにⅡ期の文語文体文章中に現れる片仮名表記にはそれぞれ個別の要因が考えられるものがあり、これらを除けば、Ⅱ期において文語文体中で片仮名表記が選択された例は、より少なくなる。表5表6に表れているⅡ期における文体ごとの文章数の差は、全体的に見れば口語文体の方に片仮名表記が出現しやすいということを示していると考えられるのである。

さらに注目すべきなのは、Ⅰ期の出現頻度の特に高い地名、例えば〈イギリス〉〈アメリカ〉〈ドイツ〉〈ヨーロッパ〉〈フランス〉などにおいて、圧倒的に総文章数の多い文語文体よりも少数の口語文体の文章の方に、片仮名表記外国地名が集中しているということである。

Ⅰ期の文語文体における片仮名表記の例は、出現頻度の高いものに注目すると、6巻1号と13巻1号とに集中している<sup>22</sup>。このうち、6巻1号では「ボルネオ島蠻王の家」、13巻1号では「國民の發展と海事との關係」と題された文章にそれぞれ用例が偏在するが、先にこれら以外の文章にみられる例について言及しておく。まず、

(16) かのオクスフォード及びケムブリッチは、即ち之が代表者なり。(6-1 教育上の雜感p.14)

(17) 此船は明年より西伯利亞のバイカル湖に於て使用せらるべきものなりと云へり、(6-1 西伯利亞の汽船p.128)

(18) マルセーユは地中海に臨める佛國最良の港にして各國の船舶常に輻湊す。(6-1 初春p.132)

(19) 最も長きが瑞典諾威人にて五十歳、(中略) ウルテンブルヒ人が卅八歳、ハバリア人が卅八歳にて (13-1 歐洲人の平均壽命p.184)

(20) この二宗教とは波斯の火教とアラビアの回教となり。(13-1 健闘と平和(上) p.58)

における、〈ケンブリッジ〉〈バイカル(湖)〉〈マルセーユ〉〈ハバリア〉〈アラビア〉は、設定した順位に入らない、すなわち総用例数が3桁に満たないほど使用頻度の低いものである。また、

(21) 文明諸國中に於て露西亞とバルガン半島の如きは最低度に在るものなるは疑なき所なり (6-1 露西亞の學校p.3-4)

(22) 萬國歸服の希望は實にユダヤ國民の千年の理想なりき。(13-1 健闘と平和(上) p.63)

(23) 數年前山上琢治がシヤトルに於けるワシントン州裁判所に敗れたるに鑑みれば (13-1 米國加州現存の日本人排斥法)

における〈バルカン〉〈ユダヤ〉〈ワシントン〉は、設定した順位には入るが、その順位の低いものである。13巻1号「健闘と平和(上)」のみ、順位の高い〈ドイツ〉〈ユダヤ〉の片仮名表記を含んではいるものの、全体としては先にも触れたように使用頻度の低さが片仮名表記選択に直接影響していると考えられるのである。

さて、今挙げた以外の例は13巻1号では全て「國民の發展と海事との關係」に現れる。この文章は、古代のフェニキア人から大英帝国まで海事に力を注いだ国家の例を多数挙げつつ、海事に力を注ぐことがいかに国家の發展に貢献するかを説いたものである。必然的に(24)のように多数

の外国地名が含まれる文章となり、考察対象に該当する例だけでも延べ240例が確認されるが、このうち234例までが片仮名で表記されているのである<sup>23</sup>。

- (24) 中古の末に當りて、海上に於けるトルコの進略を防遏し得たるは、航海術に長じたるイタリアのベネチア市、ジェノバ市等の人民が海軍を以つてトルコと頡頏したるが故なり。  
(中略) 然るにポルトガルがアフリカを迂迴してインドに至る航路を發見し、イスパニアがコロンブスに依りてアメリカを發見するや、前の二者は通商上の要路たる利を失ひて頓に衰退し、且つ海軍を發展せず、單に平和を欲して、トルコに向ひ讓歩又讓歩し、然も終にその叛圖を奪はれたり。(p.44)

さて、この文章で片仮名表記が選択されている要因として考えられることは2点ある。まず1点目の手掛かりとなるのが、(25)のようにところどころに「諸君」が用いられ、文章末尾に「卅九年十月某所にて講演◎文責在記者」(p.48)と記されていることである。

- (25) 諸君は既に立派なる専門に従事せらる。而して其の以外の事柄—歴史とか、理學とか、—いふものを多少心得られなば、其一生に種々の利益あるのみならず、専門の職務上に益することも、蓋し些少にあらざるべしと信ず。されど諸君の中には(後略)(p.40)  
つまり、この文章は講演を元に作られたのであり、講演という口頭語を意識した点で、片仮名で表記される素地があったものと考えられる。

2点目は、この講演者が箕作元八であることである。『太陽』中、箕作の名で掲載されている文章は22あり<sup>24</sup>(文語文体2, 口語文体20), それらにおいては外国地名の表記で片仮名が選択されていることが多い。文語文体で記された二つの文章(13巻4号「歴史より見たる道德の危機」同6号「西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革」)においても同様である。なかでも13巻4号「歴史より見たる道德の危機」は「國民の發展と海事との關係」と同様、講演を元に記された文語文体の文章であり、ここにおいて(26)のように片仮名表記された用例が見られることは注目される。

- (26) 國家が存亡の秋に際し、國民皆是れを自覺し、献身的精神を發揮して、これに對する總ての手段を取れば、克く國難を除き得べし。(中略) ギリシアのペルシアに對峙したる、イギリスのアルマダに對峙したる、北米合衆国のイギリスより獨立せむと計りたる、大革命時代のフランス人が歐洲大陸諸君主の大同盟に向ひたる當時、又最近の例にては、吾が日本が、清韓方面に於けるロシアの壓迫を排除せんとしたる、皆な此の好例にして、(p.44)

以上のように、「國民の發展と海事との關係」において外国地名の表記に片仮名が選択されたのには個別の理由があると考えられ、本節の主張に矛盾する例ではない。

6巻1号における先に挙げた以外の片仮名表記の例は全て「ボルネオ島蠻王の家」に現れる。6巻11号、12号にも続編が掲載されているが、どちらも表記方法は1号と同様である。

- (27) 王は何土人にして何語を母語(眞の本國)の語と為すや、余固より之を知らざれども、談話には東インドの「官話」とも稱すべき通用語たる「マライ」語を用ふ、其他ダンク、ウー(即ちイギリスの thank you の如き日用のオランダ語少々と、支那人風の亂暴なるイギリス語を少々操るのみなれども、初來の人には必ず「君ドイツ語を解するか」「ロシ

ア語を解するか」などと問ひかけて、(6-1 p.93)

「ボルネオ島蠻王の家」の場合は、この文章の筆者が神保小虎であることが片仮名表記の要因になっていると考えられる。神保の名で掲載されている文章は『太陽』中20あり<sup>25</sup>（文語文体18、口語文体2）、そのほぼ全てに、片仮名表記外国地名が見られる。例えば、初の掲載文には

(28) 地圖説明の畫 (Geogr.aphosche Characterbilder) は (中略) 地圖の欠を補ふ者なり「ドイツ」并に「オーストリア」は多く之を發行せり。(2-3地理教授略論p.109)

とあるし、同年の他号の文章にも

(29) 學者は多少諸國の語を知らざるべからざる者にして開化人種の三大國語（イギリス、フランス、ドイツ）を知らざれば眞の學者たることを得ずと言て別に顧る所なければ即ち可なり（2-7地理学雜稿p.152）

(30) (ハ) に屬する者は一地名を他の地所に比して命名せる者なり例せばアジア、小アジア、大瀧小瀧、前ライン地方、後ライン地方、イギリス、新イギリスの如し（2-8地理學者にアイヌ語學の勧めp.144）

のように、出現頻度の高い地名が、この時期から片仮名表記されているのである。以上より、6巻1号でも片仮名表記の選択には個別の理由が考えられるのであり、本節の主張に反する例とはならないといえるだろう。

#### 4. 3. 口語文体の文章における表記の選択—使用頻度との関わりから—

外国地名表記は、通時的には漢字表記から片仮名表記へ移行していく。口語文体の文章においてもその流れは変わらないが、各地名の出現頻度に注目すると、そのような流れが出現頻度によって異なるものであることが分かる。表7は、各地名ごとに、漢字表記・ルビ付き表記・片仮名表記それぞれを含む文章の数が、Ⅰ期からⅣ期にかけてどのように変化していくかを示したものである。

4.2.2節では、文語文体の文章においてより口語文体の文章においての方が、片仮名表記が選択されやすいことを指摘した。表7にも表れているとおり、口語文体の文章では、少なくともⅠ期からⅢ期までの出現頻度の特に高い語については、片仮名より漢字が主流の表記であることが分かる。

これらの地名はⅡ期Ⅲ期における様相から大きく3群に分けられる。すなわち、〈イギリス〉から〈アジア〉まで（1群）、〈トルコ〉から〈シベリア〉まで（2群）、そして〈セルビア〉から〈オーストラリア〉まで（3群）である。

1群は、基本的にⅢ期まで漢字表記が圧倒的主流で、Ⅳ期において片仮名表記に移行している。〈トルコ〉以下の地名が、Ⅱ期Ⅲ期にルビ付表記が主流の時期をはさんでいることを考えれば、これは大きな特徴である。その中で、〈ドイツ〉〈インド〉〈アジア〉がⅣ期に至っても漢字表記主流となっているが、〈ドイツ〉〈アジア〉は漢字表記主流とはいえ、Ⅲ期と比べて漢字表記に対するルビ付表記や片仮名表記の割合が大分高くなっているため、他の地名と近い傾向にあるということができよう。〈インド〉のみルビ付表記・片仮名表記の割合も増えておらず、いま述べた傾向に

反しているが、〈インド〉は古くから様々な形で漢字表記されてきた地名であり、どの漢字を使用するかは別にしても、漢字表記すること自体は長らく行われてきているので、その慣習が根強く残っているものと考えられる<sup>26</sup>。

2群の特徴は、Ⅱ期Ⅲ期がルビ付表記主流の時期となっていることである。〈セルビア〉以下

【表7】口語文体における外国地名表記

	地 名	Ⅰ期			Ⅱ期			Ⅲ期			Ⅳ期		
		漢	ルビ	片	漢	ルビ	片	漢	ルビ	片	漢	ルビ	片
1	イギリス	7		4	6	1	3	14		5	7	4	20
2	アメリカ	9		4	5	1	2	27	1	2	11	2	34
3	ドイツ	23	3	4	38	1	1	92	4	9	31	27	23
4	ロシア	11		3	7		3	25		10	12	3	19
5	ヨーロッパ	14	1	5	11		5	20	2	4	8	3	16
6	フランス	11		6	20	2	3	27	3	10	21	13	40
7	インド	12			11	1		36			22	3	2
8	イタリア	8		1	10	1	4	33		2	12	7	14
9	オーストリア	1		1	4		2	11		1	1	1	7
10	アジア	5		2	10		1	26		1	8	2	4
11	トルコ	3		1	3	7	3	5	14	1	5	1	5
12	パリ	7	1	2	3	7		13	13	2	16	14	11
13	ギリシャ	2		1	3	11	2	9	14	2	4	2	6
14	ロンドン	8	2	3	2	7	3	11	13	1	5	7	19
15	ローマ	5	1	1	2	11	3	10	8	1	7	3	21
16	オランダ	2	2	2	2	4	1	6	8	2	6	2	6
17	ベルギー	1		1	2	3		11	17	1	5	4	4
18	アフリカ	3		3		6	2	3	8	4	4	1	7
19	スペイン	1			4	5	1	6	9	1	7	1	8
20	シベリア	4	1	1		8	1	16	4	5	5		5
21	セルビア			1			1	4	4	5			2
22	ニューヨーク	2		1	1	1		5	3	1		8	12
23	ベルリン	6			6	9		7	6	1	4	4	5
24	ベルシア	1		1		4	1	5	8		2	2	3
25	ポーランド		1				2	3	4	1	2		5
26	ルーマニア			1				2	5	4	1		3
27	バルカン			1		1	4	4	12	7			2
28	メキシコ	2		1	1	2	2		1	3	2		4
29	エジプト	1			3	3	1	2	8	2	3	6	5
30	ユダヤ	3			4	3	2	7	2		3	1	3
31	ワシントン			1		1		5	2	4	2	1	11
32	オーストラリア		1	1			1		1	1			2

※漢＝漢字表記、ルビ＝ルビ付き表記、片＝片仮名表記、網掛け＝各期中用例数最多。ただし、文章数が1以上あり、かつ文章数の差が最多のものと1しか違う場合、これをも最多と同様に網掛けを施してある。

てよいものと考えられる。

3群の特徴は、Ⅱ期Ⅲ期で、片仮名表記が主流となる地名があることである。漢字表記やルビ付き表記と並んで主流となっているものが多いが、いずれにせよ、片仮名表記が主流あるいは主流の一つとなることは、他群と異なる特徴である。

Ⅱ期Ⅲ期の特徴に注目した、これら三つのグループの違いは、Ⅲ期までにおける表記選択の際の、漢字表記選択固定の度合いの高低を表している。つまり、Ⅲ期までにおいては、出現頻度が高いものほど、漢字表記選択が強く固定され、漢字表記主流の時期が長く続くのである。このことが示しているのは、口語文体の文章においては、文語文体における場合よりは片仮名表記が選択されやすいとはいえ、使用頻度の高いものは漢字選択固定の度合いが強いため、漢字表記を選択

ではⅡ期Ⅲ期の段階で片仮名表記が主流になる地名が出現することを考え合わせれば、この特徴の他群との差異はより明確である。ルビ付表記を漢字と仮名との並列表記と捉えらると、この群の地名は圧倒的に漢字表記主流の時期（Ⅰ期）から、漢字に仮名を並列させた表記を主流とする時期（Ⅱ期Ⅲ期）へと移行しているということができる。このうち、〈シベリア〉のみⅢ期における漢字表記を含む文章数が突出しているが、Ⅰ期Ⅱ期Ⅳ期においては他の地名と同じ様相であり、全体としては2群に組み入れ

することが多いということである。

さて、このようにみたときに、問題となるのがⅣ期である。

表7によれば、3群ではⅣ期において片仮名表記が主流となっている。片仮名表記が主流となっている点は1群も同様だが、3群は〈セルビア〉〈ニューヨーク〉〈バルカン〉〈オーストラリア〉のように漢字表記が選択されないものもあり、1群に比べるとより強く片仮名表記が主流になっているといえる。ただし、3群はⅡ期Ⅲ期ですでに片仮名が主流の表記になっているものが見られるので、Ⅳ期において片仮名表記に移行したと捉えるよりもむしろ、それ以前から片仮名表記

【表8】1群Ⅳ期詳細

地名	29(T12)			30(T13)			31(T14)			32(T15)			33(S2)			34(S3)		
	漢	ル	片	漢	ル	片	漢	ル	片	漢	ル	片	漢	ル	片	漢	ル	片
イギリス	2		2		1	1	1	3			6	2		7	1	1	4	
アメリカ	6		3			9		2	6	1		5	1		4	2	1	7
ドイツ	11		2		9	4	3	21	3	7	1	5	4		4	3		5
ロシア	9		1		1	2		2	2	1		6	2		8			4
ヨーロッパ	5		1		1	1		2	2	3		6			2			4
フランス	8		2		1	6	1	10	8	4	1	9	3	1	11	5		4
インド	4				3				5		5	1	2	2		4		
イタリア	4		1	1	2	4	1	5		3		2	3		5	1		2
オーストラリア			1		1	1			2			1	1		1			1
アジア	3							2		1		1	2		2	2		1

されることが多かった

ため、必然的にⅣ期も

片仮名表記主流の傾向

がより強く現れたと捉

えるべきであろう。

1群もⅣ期において

片仮名が主流の表記と

なる。Ⅰ期からⅣ期に

かけて、口語文体は

徐々に隆盛になっていくが、Ⅰ期からⅣ期までを並べてみても、口語文体の文章における、片仮名表記選択の割合が徐々に増えているようには見えない。むしろ、Ⅳ期においていわば突然片仮名表記に移行したかのように見える。1群Ⅳ期の各号ごとに詳細を示したのが表8であるが、表に示されているように〈ドイツ〉〈インド〉以外の地名では漢字表記主流の29巻1号から、ルビ表記が比較的活発に行われる30巻1号、31巻1号をはさんで、片仮名表記が主流となる32巻1号へという流れになっている。ルビ表記が活発に行われる時期をはさんで漢字表記主流から片仮名表記主流へと移行するのは、2群のⅠ～Ⅳ期の移行の仕方と似ているが、1群の特徴はルビ表記の活発な30巻1号、31巻1号において既に片仮名表記を含む文章数の最多となる地名の多いことである。つまり、2群のような移行の単なる短縮ではなく、ルビ表記が主流の表記なみに多用される時期を含みつつも、急激に漢字表記から片仮名表記へと転換したと見るのが妥当である。このことを考える手がかりとなるのが、大正12年5月に公示された「常用漢字表」(臨時国語調査会発表)の凡例2点目「固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用テモ差支ナイ。タヾシ外国(支那ヲ除ク)ノ人名地名ハ仮名書トスルコト。」<sup>27)</sup>である。「常用漢字表」の影響については、井之口(1982)が、教育をはじめ新聞社その他、各方面に大きな影響を与えたこと、東京・大阪の20新聞社が大正12年9月1日から紙上に漢字制限を実行する予定だったが、関東大震災のため実施に到らなかったと述べている(p.38)。保科孝一が大正13年2月の『太陽』誌上に「もし世間一般が千九百餘字の常用漢字に依り、新聞でも雑誌でもこの範囲で印刷し得るやうになれば、印刷の能率が非常に向上するわけでもあるし、モノタイプをひろく利用し得るやうになつて居れば、今回のやうな一大事変に遭遇しても別に困難は感じないで済むのである。」<sup>28)</sup>と述べるように、この常用漢字表は少なくともすぐには実施されていない。『太陽』には常用漢字表に従う旨の言及はないので、29巻1



号から30巻1号の変化が漢字表凡例によるものであるか否かは確定できないが、もし漢字表凡例による移行であるとしても、一斉に片仮名表記へと主流が移行することは、他群と比べるとやはり1群の特徴といえるのである<sup>29</sup>。

2群は片仮名表記と漢字表記とが同時に主流となる。これは、Ⅱ期やⅢ期前半ごろは総ルビに近い状態だったのが、Ⅲ期後半からⅣ期にかけては、ルビ無しに近い状態になっていることが大きく関係している。ルビを含む文章の減少のために、Ⅳ期においてはルビ付き表記が主流とならなかったと考えられるのである。ただ、それでは、1群よりも漢字選択は固定していなかったにもかかわらず、Ⅳ期において漢字表記と片仮名表記とがともに主流となるものがあることが説明できない。Ⅲ期までの、1群から3群にかけての違いを漢字選択固定の度合いの違いとみるならば、Ⅳ期においてもっと片仮名表記主流になっていてよいはずである。

1群では、漢字表記を主流とするⅠ～Ⅲ期と、片仮名表記を主流とするⅣ期とは中間段階を経ない移行が行われていた。換言すれば、漢字表記主流(Ⅰ～Ⅲ期)か、片仮名表記主流(Ⅳ期)か、の違いはあるにせよ、表記選択が固定していることに変わりはないのである。そう考えると、2群の場合は、表記選択の固定が1群ほど強力ではなかったために、Ⅱ期Ⅲ期においては漢字と仮名の並列表記、すなわち両方の表記を選択することが容易に可能になったのであり、紙面の都合から並列表記のしにくいⅣ期では漢字表記と片仮名表記とに選択が分裂することになったのである。さらにいえば、3群は表記選択が固定していないからこそ、主流の移行は地名によって様々に行われていると考えられる。つまり、少なくとも口語文体の文章においては、使用頻度が表記選択の固定の度合に作用しており、使用頻度が高いほど、表記選択の自由がなくなるのである。

以上をふまえると、使用頻度の高い地名で非主流の表記を選択するということは、固定的に選ばれる選択肢があるにもかかわらず、あえて別の選択肢を選んだ、ということになる。1群の場合、Ⅳ期における漢字表記選択は、Ⅲ期までの固定した選択の名残と捉えられるが、Ⅰ～Ⅲ期における片仮名表記選択には、固定した選択をくつがえすほどの強い作用が働いていると考えられるのである。

## 5. 片仮名表記の選択と文体

外国地名などの、いわゆる西洋外来語<sup>30</sup>を漢字あるいは片仮名で表記することは、周知のことながら近世以来行われてきたことである。ここで『太陽』以前に目を転じて、外国地名を含む西洋外来語の漢字表記と片仮名表記との違いについての指摘を見てみよう。

近世におけるオランダ語の輸入に注目する杉本(1998)には次のような言及がある。

さて蘭語の解釈という点で〈音訳〉も一つの重要な点であった。原語を仮字で表記するには、訳語の場合と同じように、かなりずれがでてくる。日本語ではアイウエオの五母音なのに対し、オランダ語にははるかにバリエーションがあり、(中略)開幕以来、片仮字で南蛮阿蘭陀口を表記したのも一種の音訳であるが、原語とは似つかぬ語形も出てきているのである。そこで音訳する場合、原音をできるかぎり正確に示そうとしたのも当然で、(中略)そこで漢字の使用が考えられたわけである。(p.44)

もしこの言及に従うならば、原語を意識した表記である漢字表記が仮名表記になるということは、発音が日本語化したものをそのまま表記するということであり、仮名表記になることがその語の定着を表すと考えることができる。外国地名の場合、王敏東の一連の指摘（王（1992a）（1992b）（1993）など）にもある通り、漢字表記は中国からの輸入による影響が大きい。外国地名の漢字表記という輸入による表記を仮名によって表記するというで、やはり仮名表記を語の定着と絡めて考えることができそうである。この考え方に則れば、漢字表記から片仮名表記へ移行した要因は語の定着（あるいは定着による表記の簡易化、など考えられようが、要が語の定着にあることは変わらない）であるということになる。

しかし、それでは片仮名表記へ移行した理由を説明しきれない。第一に音訳による漢字表記が、語が定着するまでの期間というには長すぎる期間使われている。その間に、例えば王（1992a）が示すように、中国では「亜非利加」となっているものを、日本漢字音により即した「亜弗利加」という表記が主流になっていくという動きがある。たとえ漢字表記であっても、発音が日本語化したものに即して表記する、すなわち先に挙げたような仮名で表記する理由と同様の理由で、漢字表記する場合があるのである。第二に『米欧回覧実記』（1878）の例言において「西名ヲ支那字ニ訳セルヲ、本邦ニ用フル音ニテ読メハ、甚タ異ナレトモ、已ニ普通トナリタルアリ、<sup>フランス</sup>仏朗西、<sup>ベルギー</sup>白耳義、<sup>ナルウエー</sup>那威、<sup>サツキセン</sup>薩撒、<sup>スコットランド</sup>蘇格蘭（以上国名）<sup>フィラデルフィヤ</sup>費拉特費、<sup>エデンボルグ</sup>壺丁堡、<sup>アムステルダム</sup>奄特坦、<sup>モスコー</sup>莫斬科、<sup>ベルリン</sup>伯林（以上都府）（中略）ノ如キ是ナリ」<sup>31</sup>と記される程度には既に外国地名の漢字表記が一般化し、さらに第二期国定教科書では将来漢字表記のものも読めるようにという配慮から外国地名の漢字表記が行われており<sup>32</sup>、このような配慮される程に漢字表記が一般的になっていたのである。そしてそれにもかかわらず、結局は片仮名表記が主流になっていくのである。

深澤（2001）は、『太陽』創刊号において片仮名表記された外国地名を含む文章が、速記録という「話すように書く」ことを念頭において記された文章であったことから、どの語形を選択したか（例えば「ギリシャ」ではなく「グリース」という語形を選択した、など）明示できる利点のあることが、速記録の文章で外国地名を片仮名表記する理由の一つであるとした。たしかに「話すように（話したように）書く」文章においては、語形明示のため等により、仮名表記が選択されたということができる。言文一致体においても、あるいはそのような説明が可能であろう。しかし、漢字表記から片仮名表記への移行の要因を同様に説明することはできない。

説明のためには、言文一致体と口語体との違いに目を向ける必要があるのではないか。そもそも現在使用される文章の文体に直結する口語体と、言文一致体とは、捉え方が異なるものである<sup>33</sup>。口語体は「話すように書く」ことから生まれた文章ではない。山本（1971）における「日本近代文体形成の歴史」の六期区分に従えば、『太陽』は第四期「第二自覚期」（明治28—32年<sup>34</sup>）、第五期「確立期」（明治33—42年）、第六期「成長・完成期」（明治43—大正11年）を含むが、第四・第五期は本稿でのⅠ期に、第六期はⅡ期Ⅲ期Ⅳ期にほぼあたっている。第四・第五期において言文一致体普及への運動再活性化から、小説界・教育界において言文一致体が絶対のものとして普及したのを受けた第六期は、「各作家の個性発揮にも堪え、また簡潔高尚な論文体にも適当な近代口語文体としての加工彫琢への努力が専ら払われ、ついにそれをほぼ達成した」（p.37）時期と説明される。

ここで注目したいのは、『太陽』のⅡⅢⅣ期すなわち口語文体が隆盛になっていく時期が、言文一致体のある程度の普及後に行われた、より多様な使用に耐えられるようにするための、文体の整備の時期であるということである。言うまでもなく言文一致体は文章語の口頭語への接近を意図して作られた文体である。森岡(1991)も触れているとおり(p.131—132)、上田(1895)が、標準語が「文章上に用ゐらるゝ上の注意」として述べているように、言文一致体は書くための基準を設けた上で書記されるものであり、結果的にこの言文一致体が普及したが、しかし「話すように書く」ことに最も重点を置いた文体であることに変わりはない。それに対して、言文一致体がある程度普及したのちにさらに手を加えて作られた口語体は、たとえ手を加えることでさらなる口頭語への接近があったとしても、文体確立のために最も重点が置かれたのは書き言葉、文章語としての整備<sup>35</sup>ではなかったか。「話すように書く」ことは口語体にとってはもはや最重要の課題ではなかったはずである。

外国地名表記の片仮名表記への移行の要因は、言文一致体にも口語体にも共通する文体の性質に求められなければならない。文語文体において、数は少ないものの個別の要因を求められない片仮名表記の例があるということは、口語体であることが直接片仮名表記選択の要因になっているのではないことを示している。4節で見たように口語文体における外国地名の例が全て片仮名表記というのではないことも同様のことを示している。よって、漢字表記から片仮名表記への移行の動機は文体には求められない。

深澤(2001)では、文体による片仮名表記の「受け入れ易さ」という考え方を提示した。具体的には、速記録という文体であることが、片仮名表記を選択させやすい素地を作っているとして提示したものである<sup>36</sup>。これを改めて定義すると次のようになる。

表記の受け入れ易さ：表記選択において、特定の選択をする、あるいはしないことを促さないこと。

4節でみてきたように、文語文体においては、使用頻度の高く漢字表記に選択がほぼ固定されている地名は、特別な理由のない限り基本的に片仮名表記が選択されることはなかった。一方、口語文体においては、同様の地名は固定された選択に従い漢字表記されていることもあるが、同時に片仮名表記が選択されることもある。このことが示しているのは、文語文体は表記の受け入れ易さを持たないが、口語文体は表記の受け入れ易さを持つということである。言文一致体も口語体も共通して表記の受け入れ易さを持つと考えられるのである。

速記録や言文一致体が表記の受け入れ易さを持っていたのは「話すように書く」からではなく(もし「話すように書く」ことが表記の受け入れ易さになるのであれば、Ⅰ期口語文体における漢字表記の例はもっと少なくてよいはずである)、それらが従来の書記法にとらわれない文体であったためである。言文一致論が国字改良論と同時に論じられてきたように、従来の語法にとらわれない文体である言文一致体は、同時に従来の書記法にとらわれない文体であったともいえる。言文一致体と口語体とは、先に述べたようにそもそもの捉え方が異なるものではあるが、それは「話すように書く」文体か否かに注目した場合であり、表記の受け入れ易さは引き継がれ得る。文語文体に比して、従来の書記法にとらわれないという点ではどちらも同様であると考えられるからである。

文語文体における、個別の要因の考えにくい片仮名表記の例は、別の見方をすれば文語文体主流の時期から片仮名表記という方向性が生まれていた（あるいは生まれつつあった）ことを示していると捉えられる。本稿の調査ではその方向性を生んだ原因、すなわち移行の動機については明らかにしえないが、何らかの動機により生じた片仮名表記へという方向性が、表記の受け入れ易さを持つ口語文体の登場、普及により促進されたことが調査結果から読み取れる。4. 3 節に述べたような、使用頻度の高い地名の片仮名表記選択にはたらいた強い作用とは、口語文体における片仮名表記の受け入れ易さにより顕在化した、漢字表記から片仮名表記へという方向性であると考えられるのである。

文語文体において、数はごく少ないものの、使用頻度の高い地名に個別の要因の考えにくい片仮名表記の例が現れているということから、文語文体主流の時期から片仮名表記へという方向性は生まれていた（あるいは生まれつつあった）と考えられる。しかし、文語文体では、語彙語法的に新たなものについてはある程度受け入れる力があっても、表記にまではその力は及ばなかった。口語文体が登場したことにより、そしてそれが主流の文体になっていったことにより、漢字表記から片仮名表記の移行が加速されたと考えられる。

以上から片仮名表記への移行の要因を結論づけるなら、外国地名が定着したから仮名表記になったというよりは、むしろ、外国地名が日本語として定着したからこそ日本語の文体の影響を受けやすくなり、片仮名表記に転じていったと考えるべきである。使用頻度の高いものほど表記の選択に口語文体の登場による強い作用がはたらき、結果片仮名表記が選択されたということは、使用頻度の高さが語の定着に大きく作用すると考えれば、外国地名の定着が文体からの働きかけを引きおこし、片仮名表記に転じるというという結果をもたらしたことを示していると捉えられるのである。

## 6. おわりに

以上本稿では博文館刊の総合雑誌『太陽』を資料として、文語文体・口語文体の別が外国地名表記の選択、すなわち漢字表記・片仮名表記のいずれを選ぶかにどのように関わっているかを見てきた。そして考察の結果、新たな文体である口語文体が持つ表記の受け入れ易さが、外国地名における漢字表記から片仮名表記への移行の要因であると結論づけた。

ただし、結論と同時に大きな疑問が残る。そもそもなぜ片仮名表記へという方向性が生まれたのか。この点については、本稿は明らかにする術を持っていない。先にも述べたように、本稿が明らかにしえたのは、厳密には片仮名表記への移行を促進した要因であって、移行の動機ではないからである。

これは本稿では漢字平仮名交じり文のみに注目していることに理由があると考えられる。漢字片仮名交じり文と漢字平仮名交じり文とが並存していた時期から、統一的に漢字平仮名交じり文が使用される時期へ、という表記史の大きな流れを見据えて本稿での結論を捉えなおしたときに、移行の動機を捉える手掛かりが得られると考えられるのである。

このことを念頭におきつつ、片仮名表記へという方向性を生み出した要因をつかむことが今後

の課題である。

#### 注

- 1 近代語における片仮名表記史を考えるという問題設定からすれば、平仮名との対照により進める考察も可能である。現に、土屋（1981）は論文発表当時の漢字平仮名交じり文中に見られる和語の片仮名表記について、同じ表記方法が明治期の朝日新聞や『浮世風呂』にも見られることを指摘している。『太陽』にも同様の片仮名表記が無いわけではない。ただし、これらは土屋が注目したように、近世の文献との比較により考究されるべき問題であろう。よって、本稿では和語の片仮名表記については取り上げない。
- 2 なお、本稿でいう「表記の選択」とは、漢字あるいは片仮名あるいは平仮名のいずれによって表記するかということであって、「アジア」と「アジヤ」や、「阿弗利加」と「阿非利加」のような違いは、考察の対象としない。
- 3 貝によれば、「第一期 明治三十七年（一九〇四年）より使用。『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一〜八。義務教育は四年間。」「第二期 明治四十三年（一九一〇年）より使用。『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）巻一〜十二。この期以後第五期まで義務教育は六年間。」「第五期 昭和十六年（一九四一年）より二学年ずつ使用開始。『ヨミカタ』一・二、『よみかた』三・四、『初等科国語』一〜八（今日アサヒ読本と俗称）」とある。（p.160—161）
- 4 石綿（2001）p.83—93に指摘されるように、外来語には近い意味範疇を持つ和語・漢語と並存させて、「新しい感じ」などの価値が加わる語として用いられる場合がある。しかしそのようなことは外国地名には少ないと考えられる。よって、表記の選択について、価値以外の考察を行うのに適している。
- 5 他に『日本』（『亜細亜』『日本及日本人』）も、明治期を刊行期間に含む総合雑誌として考えられるが、最終的に「雪嶺（三宅雪嶺—引用者注）の個人雑誌的な性格を強めて行くことになる」（中央公論社（1975）p.469。引用部分は前田愛執筆）ことから、本稿の調査資料としては適していないと判断した。
- 6 この点も、大きく表記史を捉える資料としては重要な側面であると考ええる。
- 7 全ての用例は『CD-ROM版近代文学館⑥ 太陽』（日本近代文学館1999）収録画像より採取。
- 8 漢字片仮名交じり文における外来語表記については、飛田（1998）の検討がある。また、深澤（2003）では『太陽』の先行雑誌の一つである『日本大家論集』を資料として、漢字片仮名交じり文における外来語の表記選択について調査した。
- 9 題名、表、箇条書きの文の3ヶ所は、字数を抑えるための表記が行われている可能性が高いと考え、調査範囲から除外した。また、引用部分とは、鍵括弧でくくられていたり、二字下げになっていたたりしている引用文（語句）のことを指す。
- 10 平仮名表記の例は「いんど」（13-1, p.44）, 「から国」（12-1, p.131）, 「こま人」（2-1, p.251）, 「ぺきん」（9-1, p.93）の4例、またアルファベット表記の例は「Warsaw」（20-1, p.171）, 「Bragil」（16-1, p.156）, 「California」（33-1, p.44）の3例である。なお、「小アジア」「西欧羅巴」などの「小」「西」の部分は地名と考えず、それぞれ「アジア」「欧羅巴」と同様に扱うことにした。
- 11 以下、〈 〉は表記に関係なく地名そのものを示すときに用いる。実際の表記を示す場合は「 」を使用する。
- 12 以下、用例の所在は（巻一号、頁）で表し、必要に応じて用例を含む文章のタイトルを加える。また、実際の用例は縦書きである。「サハラ」のように下線が付されているものは、実際には右

- 側に傍線が付されていることを示す。引用中傍線（下線）・傍点は全て原文による。ルビは適宜省略し、合字は全てひらいた。
- 13 対象外とした地名については注19参照。
- 14 佐伯（1987）の用語による。
- 15 片仮名ルビ、平仮名ルビの別も、考察の余地があると考えられるが、本稿では本行表記に考察の重点をおいたため、ルビにおける片仮名表記・平仮名表記の別は表1に示すにとどめる。
- 16 とりあげられている外来語のほとんどが外国地名である。
- 17 先に挙げた『太陽』創刊号収録の欄名からも推測されるように、『太陽』に掲載された文章は実用的な内容のものがほとんどである。よって、文体を分類するには、実用文における文体の分類を参考にすべきであり、その点でも森岡（1991）は有効である。また、太陽初期の号で「口語文体」と分類したものの中には、途中で文末表現に「なり」など文語文体に用いられる語法が混用される場合もあるが、本稿では口語文体の語法に従った文の方が文語文体の語法に従った文より多いことを理由に、口語文体と認定した。
- 18 文章の定義は『日本文法事典』（北原保雄ほか（1981）、有精堂出版）の「文が幾つか集まってそれ自体で完結し、全体で一まとまりのものとして統一のある思想・内容を現しているものを、「文章」と呼ぶ。」（p.335、「文章」の項。前田富祺執筆）に従う。文章数を数えるにあたっては、有タイトルのものは、そのタイトルの及ぶ範囲までを、無タイトルのもの（コラム的なもの等）は、同テーマで貫かれている一項目を、それぞれ一単位とした。
- 19 出現頻度の高さの順位は、3. 2節に示した調査範囲内の全用例（すなわち、簡略表記や一方の表記しか選択されていないものをも含めたもの）の延べ語数の多少により決定した。考察には両方の表記が選択されているものしか扱っていないが、実際には、ここに挙げたものの他に〈支那（清国）〉〈朝鮮〉〈韓国〉〈満州〉〈台湾〉〈北京〉〈太平洋〉〈チベット〉（以上用例数の多い順）が入っている。また、33位以下を挙げていないのは、紙面の都合もあるが、総用例数が99例以下となり、表3から表7までのように分類し考察していく上では、母数として不十分と考えたためである。
- 20 そもそも外国地名が漢字表記されるに至る経緯については、中国からの影響を考える必要があるのは当然であるが、本稿は片仮名表記が選択される要因について考察することが主目的であるので、本節では漢字表記される経緯については取り上げない。中国からの影響については5節で触れる。
- 21 文章中〈メキシコ〉は漢字表記14例（うち「墨西哥國」4例・文脈から国名と判断できる例1例）、片仮名表記13例（うち「首府メキシコ」「メキシコ府」計5例、文脈から都市名と判断できる例2例）である。文脈からは国名・都市名どちらも判断しかねる例もあるが、「国」が決して片仮名表記と共に用いられず、「府」が決して漢字表記と共に用いられていないことから、意識的に使い分けがなされていると判断できよう。
- 22 出現頻度の低いものには、これら以外の号にも用例の現れるものが多くなるが、これは使用頻度の低さが片仮名表記選択を誘発したと考えられる。詳しくは、4. 3節で触れる。
- 23 以下の地名が見られる。〈アジア〉〈アテネ〉〈アフリカ〉〈アメリカ〉〈イギリス〉〈イタリア〉〈インド〉〈エジプト〉〈オーストラリア〉〈オーストリア〉〈オランダ〉〈ギリシャ〉〈コンスタンチノーブル〉〈スペイン〉〈セイロン〉〈デンマーク〉〈ドイツ〉〈トルコ〉〈バルカン〉〈フランス〉〈ペルシア〉〈ポルトガル〉〈モロッコ〉〈ヨーロッパ〉〈ローマ〉〈ロシア〉〈ロンドン〉。また、漢字表記の例は「英吉利」「印度洋」「和蘭」「独逸」「西部欧羅巴」「羅馬」の6例である。

- 24 『CD-ROM版近代文学館⑥ 太陽』中の「太陽総目次」データベースによる。
- 25 注24と同。
- 26 〈インド〉の漢字表記については、王(1992a) p.13に言及がある。
- 27 『漢字と国語問題』(漢字講座11巻, 明治書院1989) 付録の「大正十二年五月臨時国語調査会常用漢字表」(p.365-370) より引用。
- 28 「震災に面して国語整理の急務」『太陽』30巻2号, p.95
- 29 貝(1997)によれば、国定国語読本における外来語の片仮名表記は第二期読本(明治43年より)より始まっており、この「常用漢字表」凡例以前に外国地名の片仮名表記が意識的に実施された例のあることが知られる。ここで「常用漢字表」凡例の影響に言及するのは、あくまで『太陽』に対する影響について言及しているものであり、全ての資料・用例に対して影響があったと述べているのではない。
- 30 石綿(2001)の用語による。
- 31 『米欧回覧実記(一)』(1985) 岩波書店(岩波文庫青141) p.17より引用。引用中〈 〉は割り注であることを示す。
- 32 貝(1997)の指摘(p.201-203)による。
- 33 本稿の調査に用いてきた「口語文体」はここでの口語体と言文一致体とを含むものである。
- 34 山本の分類での期間を示す。
- 35 山本(1981)によれば、「志賀直哉(昭和六二)は、彼の『好人物の夫婦』(大六)の書き出しの非凡な文章について、当時菊池寛を「何といふ冴えた文章」「何と云ふ簡潔な力強い表現」とうならせたほど、簡潔的確な口語体を完成した。志賀の出現によって、口語文通弊の冗長軟弱性は全く克服され、近代口語文体は完成を見た。」(p.50)
- 36 「つまり、個々の例について片仮名表記された要因を速記録に求めるのではなく、文体による片仮名表記の「受け入れ易さ」というものを想定し、片仮名表記の「受け入れ易さ」を背景として「戦争後の学術」において外国地名が片仮名表記されたと考えられるのである。」(深澤(2001) p.209)

#### 参考文献

- 石綿敏雄(2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 井之口有一(1982)『明治以後の漢字政策』日本学術振興会
- 上田万年(1895) 「標準語に就きて」『帝国文学』1-1, 14-23, 大日本図書
- 王敏東(1992a) 「外国地名の漢字表記について―「アフリカ」を中心に―」『語文』58, 12-34, 大阪大学国語国文学会
- 王敏東(1992b) 「外国地名の漢字表記をめぐって―「オーストラリア」を中心に―」『待兼山論叢文学編』26, 17-39, 大阪大学文学部
- 王敏東(1993) 「意識された外国地名について―「紅海」の漢字表記をめぐって―」『国語語彙史の研究』13, 229-246, 和泉書院
- 貝美代子(1997) 「国定読本の外来語表記形式の変遷」『国語論究6 近代語の研究』, 160-218, 明治書院
- 木坂基(1976) 『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房
- 見坊豪紀(1957) 「明治時代の文語文―普通文ができるまで」『言語生活』74, 32-41, 筑摩書房
- 国立国語研究所(1987)『国立国語研究所報告89 雑誌用語の変遷』秀英出版

- 小林雅弘（1982）「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」『文研論集』8, 139-181, 専修大学大学院文学研究科
- 佐伯哲夫（1986）「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」『国語年誌』5, 1-16, 神戸大学国語教育学会
- 佐伯哲夫（1987）「官板バタビヤ新聞における外国地名表記」『関西大学文学論集 創立百年記念特集（上）』, 145-173, 関西大学文学会
- 杉本つとむ（1998）『杉本つとむ著作選集4 増訂日本翻訳語史の研究』八坂書房
- 鈴木貞美（1996）「創刊期『太陽』論説欄をめぐって」『日本研究』13, 63-76, 国際日本文化研究センター
- 鈴木貞美（2001）「明治期『太陽』の沿革, および位置」『雑誌『太陽』と国民文化の形成』, 3-37, 思文閣出版
- 田中牧郎・小木曾智信（2000）「総合雑誌『太陽』の本文の様態と電子化テキスト」『日本語科学』8, 141-152, 国書刊行会
- 中央公論社（1975）「総合雑誌太平記」『中央公論』90-11, 461-500, 中央公論社
- 土屋信一（1966）「雑誌『太陽』（明治28-昭和3）に見る表記の変遷」『言語生活』182, 36-42, 筑摩書房
- 土屋信一（1967）「雑誌『太陽』の用字の変遷」『言語生活』193, 34-43, 87, 筑摩書房
- 土屋信一（1977）「現代新聞の片仮名表記」『国立国語研究所報告59 電子計算機による国語研究Ⅷ』, 140-159, 秀英出版
- 土屋信一（1981）「『浮世風呂』の片仮名表記語」『近代語研究』6, 407-426, 武蔵野書院
- 永嶺重敏（1997）「明治期『太陽』の受容構造」『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール
- 西浦英之（1971）「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称呼・表記について」『皇學館大学紀要』9, 151-202, 皇學館大学
- 飛田良文（1998）「外来語の取り入れ方の変化」『日本語学』17-6, 29-38, 明治書院
- 深澤愛（2001）「雑誌『太陽』創刊号における外国地名片仮名表記」『国語文字史の研究』6, 187-218, 和泉書院
- 深澤愛（2003）「漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文と外来語表記—『日本大家論集』を資料として—」『国語文字史の研究』7, 和泉書院
- 松村明（1977）「新井白石と外国語・外来語の片仮名表記」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』, 1093-1136, 明治書院
- 森岡健二（1991）『近代語の研究 文体編』明治書院
- 山本正秀（1971）『言文一致の歴史論考』桜楓社
- 山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社

付記：本稿は、近代語研究会第188回研究発表会（2001年10月）における口頭発表「総合雑誌『太陽』における外国地名片仮名表記—文体との関わりに注目して—」の内容を基にまとめたものである。

（投稿受理日：2003年2月18日）

（改稿受理日：2003年5月21日）



深澤 愛（ふかざわ あい）

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

zawa3@pop21.odn.ne.jp

# Alternative notation of words in mixed *kanji-hira-gana* orthography in *Meiji-Taisho* era

FUKAZAWA Ai

Graduate student, Osaka University

## Keywords

alternative notation, *katakana*, colloquially-based written style, *Taiyo*

## Abstract

This paper clarifies one of the causes of notational shift of loan words from *kanji* to *katakana* in *Meiji-Taisho* era. In this regard, I investigate an alternative notation, writing in *kanji* or *katakana*, of foreign place names in the magazine *Taiyo* (太陽) issued by *Hakubunkan* (博文館) from 1895 to 1928.

Two main results emerge from the investigation. 1) A colloquially-based written style more easily accommodates a choice of writing in *katakana*. (The choice in using *katakana* is easier to do in colloquially-based written style, than in former writing style.) 2) The notational shift of frequently used foreign place names from *kanji* to *katakana* was prevented and kept latent while former writing style was in common, and it appears more clearly, and quickened, after a colloquially-based written style became the norm.

According to these two points, I draw the following conclusion: Foreign place names formed an item of the lexical system of Japanese, and this caused the colloquially-based written style operating in the language to force the alternation of notation of foreign place names. As a result, the notation of foreign place names shifted to *katakana*.